

『稲むらの火』

最近、息子が仕事を手伝ってくれるようになりました。週に一度程度ですが、楽をさせてもらっています。昼に、食事をしながら会話するようになりました。「おまえは、いいよな」と言うと、「なにが？」と答えます。「おまえは、西宮生まれの、西宮育ちで都会っ子やろ。大学も家から通えて、それもお父さんのスポーツカーやで」「それがどうしたん」と息子が返すので、「お父さんはな、大学時代にはほとんど同じ服やったで」というと、「お母さんと結婚できたやん」と返します。その通りです。

私は、和歌山の田舎育ちで「誇り高い、カントリー・ボーイ」と自負していますが、コンプレックスも持っています。「和歌山に何か自慢出来るものがあるのかな？」と常に考えていました。

昨年、新聞に「紀州広川が生んだ、濱口梧陵 生誕200年シンポジウム」という見出しがありました。「これは、行かなければ」と思い、大阪でのシンポジウムに行ってきました。そして、和歌山にも立派な人物がいることに安堵し、誇りに思いました。

濱口梧陵は、かつて小泉元総理が国会で「稲むらの火」という話しをした時の主人公です。明治の文豪・小泉八雲によって「生ける神(A Living God)」として世界中に発表され、感動を呼び、その後「稲むらの火」というタイトルで小学校の教科書にも掲載されました。紀州湯浅は、醤油発祥の地です。梧陵は紀州広川と関東の銚子に醤油倉を持つ濱口家「ヤマサ醤油」の7代目当主でした。

幕末の切迫した国際情勢に危機感を持った梧陵は、当時の砲術の第一人者であった佐久間象山に師事し、若者の教育が重要だと考え、故郷の広川に「広村稽古場」を開設し、武道とともに国学や漢学の教育をする体制を整えます。たまたま梧陵が帰郷していた 1854 年 11 月 4 日に安政東海地震が発生しました。地震後の津波の襲来を知っていた梧陵は村人を高台に避難させましたが当日は、津波の来襲はなかったため村人は、家に帰りました。

しかし、翌日の 11 月 5 日に、昨日よりはるかに強烈な地震が襲来しました。安政南海地震です。10 分後に、最高5メートルの津波を含めて7回も津波が来襲しました。梧陵も一度は津波に巻き込まれましたが、なんとか高台に流れ着き無事でした。季節は冬で、すぐに真っ暗な状態になったため、海上に流された村人は方向が分からないのではと心配になり、道端に積み上げてあった刈り取った稲に火を放ち目印にしました。その結果、9名が助かりましたが、死者 36 名、家屋の被害 339 軒という大被害になりました。この話を、後に聞いた小泉八雲が 1897 年に「A Living God」と言う本を出版し紹介したのです。その内容が「小学国語読本」に掲載され、全国に知られるようになりました。その後、11 月 5 日が「世界津波の日」となったのです。

しかし、梧陵が立派なのは、津波の後、家も船も家族も失った村人が離散してしまわないために様々な対策を行なった事です。まず、周辺の村から貯蔵米や年貢米を借りて村人に配り、漁船や農具も私費で購入して無償で配布するなどしますが、それだけでは生活出来ないと、自分で公共事業を開始しました。国に依存したのでは時間がかかりすぎ、村人が離散してしまうと判断したのです。

被災から3か月後に3年かけて海岸に全長 670 メートルの防波堤を建設し、毎日 500 人近い村人を雇用し、その日のうちに日当を払ったのです。述べ5万7000人近くを雇い、現在価格で20億円にもなる私財を投入しました。八雲が生き神様と表現したのもうなずけます。この時代に、すばらしいロータリアンがいたのです。私も、故郷の誇りと自慢出来ます。

